

神戸三宮「さんきたアモーレ広場」デザインコンペに係る講評

1. 総評

まずは、建築・ランドスケープの専門家のみならず、一般の市民の方や、高校生から大学生の方々まで、幅広く多くの方に関心を寄せていただき、全国及び海外からも応募いただいたことに、審査委員会として心から敬意を表したい。

本コンペの対象となる「さんきたアモーレ広場」は、2021年春開業予定である神戸阪急ビル東館の建替により、神戸市で進めている「えきまち空間」の中で最も先行して再整備が進む北西エリアに位置する。コンペでは、三宮北西エリアの玄関口としてふさわしいデザイン性、現在建替工事が進められている神戸阪急ビル東館や歩行者中心の道路へと再整備予定のサンキタ通りとの調和やまちとのつながり、さらには将来的な「えきまち空間」の核となる「三宮クロススクエア」との連動性を見据えた広がりのある提案が望まれた。

今回の広場は、独立した閉鎖的な空間として捉えるガーデン型として解くか、開放的な周辺とのつながりの空間として捉えるプラザ型として解くかで、最終的なアウトプットが大きく変わる。応募作品全体としては、待ち合わせ場所としてのシンボリックさを追及する‘図’としての案が多かった一方、将来の「三宮クロススクエア」を意識しながら、‘地’にどういった影響力をもたらすプランかという、都市の広場としてのあり方が問われたコンペでもあった。

その中で、最優秀作品の「Lean on Nature」は、シンボリックなサークルを用いたデザインでありながら自然に寄り添う落ち着いた居心地のよい広場空間を創出し、周囲との空間的なつながりも考慮されている、まさに全体として‘地’をデザインしながら、‘図’の要素が光る、都市における自然との新しい向き合い方を求めたプラザの性格を備えた作品といえよう。

コンペの場合、チャレンジ性か、安定感か、どちらを選択するかは、毎回大変悩ましい問題であるが、神戸は歴史的に先進的なデザインを積極的に取り込んできた都市であることから、今回の入賞作品のようなチャレンジしたデザインが選ばれたことは、大変神戸らしい選択であったといえる。また偶然にも、入選者の方々が20代から30代の建築・ランドスケープ界の若手であった。クリエイティブな若者の手によって神戸のまちの未来がデザインされることを歓迎しつつ、今後の受賞者の活躍に期待したい。

広場の実現にあたっては、最優秀作品のもつ造形的な美しさを損なうことなく、まちと調和した魅力ある広場となるよう、十分な調整と検討を市にお願いしたい。

今回のコンペは、神戸の新しい象徴として「えきまち空間」という人中心の広大な空間を、都心のまさにエントランス部分に創出する壮大なプロジェクトの布石であり、単独で完結する広場整備のコンペではない。「えきまち空間」全体での調整を図りながら、三宮再整備の更なる取り組みに期待したい。

2. 選評

最優秀作品の「Lean on Nature」は、特に次のような点が高く評価された。

- ・豊かな木々とこれまで広場の象徴であった円を柔らかく配置することによって、歴史を引き継ぐと共に、人々が自然へ寄り添うイメージをわかりやすく表現している。
- ・造形美が卓越しており、神戸にふさわしい先進的なデザインである。
- ・シンボリックなデザインでありながら落ち着いた居心地のよい広場空間を創出し、周囲との空間的なつながりも考慮されている。

入選となった「Crossing Plaza」は、造形的に優れ、水と緑のイメージが港と六甲山のイメージと重なり、デザインが秀逸であったことが高く評価されたが、この広場の規模ではスケール感が合わず長所が十分に活かされないとの見解であった。

また、「風巡りの広場」は、もともと都市プラザ的であり、動線をうまく読み解き、エッジの部分にだけファニチャーをおいているミニマムなデザインである点が高く評価されたが、イベントを開催していない日常時の魅力が伝わりにくかったことが指摘された。

「へそとへその緒」は、造形力に優れ、ひとつの造形が様々な用途を許容するアイデア、斬新な点（プレゼン）が評価されたが、安全性の確保が懸念された。

アイデア賞となった「クスノキ山」は、シンボリックなアーケードのランドマーク性と分かりやすいサインアイデアが評価された。

「まちの羅針盤」は、都市プラザ的なアイデアと、人の居場所と流れをメッシュシートで表す斬新な発想が高く評価された。

平成 31 年 4 月 12 日

神戸三宮「さんきたアモーレ広場」デザインコンペ選定委員会

委員長 川崎 雅史